

機関番号：34416

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19730528

研究課題名（和文）

在日ブラジル人青少年の進路・教育選択に関する教育人類学的研究

研究課題名（英文）

Anthropological Study on the Career Decisions of Brazilian Youths in Japan

研究代表者

山ノ内 裕子（YAMANOUCHI YUKO）

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：00388414

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、在日ブラジル人のフォーマル教育、インフォーマル教育およびノンフォーマル教育の民族誌的調査をとおして、在日ブラジル人青少年の進路・教育選択過程を、教育人類学的観点から明らかにすることである。研究の結果、(1) 在日ブラジル人を、定住者もしくは一時的在留民としてではなく、二つの国に足場を持ちつつ生活する人々として、動的に捉えることが必要であること (2) 在日ブラジル人の進路・教育選択において、2008 年秋に起こった世界金融危機は大きな影響を与えていること (3) 在日ブラジル人の進路・教育選択において、ブラジル人学校が果たす役割が大きいこと、の三点が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to reveal the process of career and education options of Brazilian juveniles living in Japan in the light of educational anthropology through the ethnographic investigation of formal education, informal education and non-formal education of Brazilians living in Japan. As a result, this research revealed the following three points; (1) Brazilians living in Japan should be dynamically understood as people who live in Japan while having their footholds in two countries, not as permanent settlers or temporary residents, (2) the global financial crises which occurred in the autumn of 2008 has been significantly affecting career and education options of Brazilians living in Japan, (3) Brazilian schools play great roles in career and education options.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,200,000	690,000	3,890,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教育人類学、社会学、日系ブラジル人、在日ブラジル人、進路・教育選択、ブラジル人学校、ブラジル

1. 研究開始当初の背景

2007年の研究開始当初、在日ブラジル人の人口はおよそ30万人であり、在日ブラジル人の多くは、定住化に向かっていていると見られていた。日本での住宅の購入や在留資格「永住」の取得は定住化の現れといわれており、日本の小中学校で学んだ後、ブラジルに帰国せず、引き続き日本で生活する子どもたちが年々増えていった。本研究は、ブラジルへ帰国した子どもも含めて、日本滞在経験を持つ日系ブラジル人青少年たちの進路・教育選択について、教育人類学的に明らかにしようとして試みたものである。

1990年の入管法改正直後とは異なり、今日、在日ブラジル人の子どもたちの進路は多様化している。中学校での進路指導や高校側の特別措置のおかげで、中学校卒業後の進路としては、工場で就労するという選択肢のほか、引き続き日本の高校に進学するということが可能になってきた。

一方、在日ブラジル人子弟の教育選択としては、ブラジル政府の認可を得て、ポルトガル語でブラジルのカリキュラムによって教育を行う、「ブラジル人学校」がある。国内では、ブラジル人集住地域を中心に、全盛期では90校を超えるブラジル人学校があった。

このように、入管法改正から15年以上経過し、ブラジル人の定住化が進むなか、ブラジル人青少年の進路・教育選択は多様となってきたが、そうしたブラジル青少年の進路・教育選択については、研究の蓄積が多いとはいえない状況にあった。とりわけ、進路・教育選択の一つであるブラジル人学

校での教育の実態はあまり把握されてこなかった。

2. 研究の目的

前述のような背景から、本研究では、在日ブラジル人のフォーマル教育、インフォーマル教育およびノンフォーマル教育の民族誌的調査をとおして、在日ブラジル人青少年の進路・教育選択過程を、教育人類学的観点から明らかにすることを試みた。そのため、以下の三つの課題を設定した。

(1) 家庭環境およびその背景にある階層分化の分析

(2) 地域社会（エスニック・コミュニティを含む）における子どもたちの状況の民族誌的調査

(3) ブラジルの教育制度における代替的教育の調査

しかし、研究開始後、在日ブラジル人を取り巻く状況は、2008年秋の世界金融危機の影響を受けて大きく変化した。在日ブラジル人の多くが職を失い、子どもたちは親の失業や給料の減少によって、帰国や国内での転居を余儀なくされたり、学校を退学したりせざるを得なくなったのである。加えて、調査を予定していたブラジル人学校が閉校したり、調査協力の内諾を得ていた方が帰国したりと、予定していた調査を実施するには困難な状況が発生した。定住化に向かうとみられていた人々が次々に帰

国し、ブラジル人学校では次々に退学者が出た。

こうした状況を鑑み、研究テーマを若干変更する必要が生じた。経済状況が急激に悪化し、生活に困窮したインフォーマントに対して、長期的な展望での進路・教育選択を語ってもらうインタビュー調査は実施困難である。そこで、在日ブラジル人青少年の進路・教育選択過程に関するインタビュー調査を無理に続行することよりも、経済危機の最中でブラジル人の青少年が置かれている状況を正確に把握し、どのような支援が必要であるかを調査することこそが必要であると判断した。

2008年後半からは、公立小中学校、ブラジル人学校、公立学校、教育委員会、自治体、地域の国際交流協会、NPO団体など、ブラジル人青少年にかかわるさまざまな場所や人々に対してヒアリング調査を開始した。

また、ブラジルでは当初、ブラジルの教育制度における代替的教育の調査を予定していたが、リーマンショック以降、ブラジル日系社会でのインパクトを調査することにした。

3. 研究の方法

本研究は、文献研究とフィールド調査の二本立てで行った。文献研究では、外国人児童生徒教育やブラジルの学校教育に関する研究のレビューを行った。また、教育学のみならず、社会学や文化人類学、そして外国人労働者や移民研究など、関連領域も含めて幅広い範囲から文献の収集を行い、理論的枠組みを構築することに務めた。

一方、フィールド調査では、国内のブラジル人コミュニティと、ブラジル日系社会で行った。国内のブラジル人コミュニテ

ィは全国にまたがっているが、ブラジル人の集住状況や行政の取り組みは自治体ごとに異なっている。

群馬県（大泉町、太田市）、静岡県（浜松市）、愛知県（名古屋市、西尾市、豊橋市）、岐阜県（大垣市、可児市、美濃加茂市）滋賀県（米原市、長浜市、愛荘町）、広島県（福山市、呉市）でフィールド調査を行ったが、定点観測を目的として、継続的な調査を行ったのは、静岡県浜松市、岐阜県大垣市、広島県福山市、滋賀県米原市および長浜市である。これらの市では、教育委員会や市役所、国際交流協会、NPO組織などの訪問調査を行い、関係者からヒアリング調査と資料収集を行った。また、ブラジル人学校や公立学校においても、参与観察やインタビュー調査を行い、学齢期の子どもがいるブラジル人家族に対しても、インタビュー調査を実施した。

ブラジルでは、サンパウロ州サンパウロ市、サントス市、アルバレス・マッシャード市、プレジデnte・プルデnte市において、フィールド調査を行った。主な訪問先は、サンパウロ人文科学研究所、CIATE(国外就労者情報援護センター)、ブラジル日本文化福祉協会、サントス日本人会、アルバレス・マッシャード日伯文化体育農事協会、プレジデnte・プルデnte文化農村体育文化協会、日本への就労を斡旋している旅行業などである。フィールド調査では、関係者へのインタビューや上述の日系団体での参与観察によって、リーマンショック後の日系社会の変化や、日本での就労から帰国した人々の状況について、情報収集を行った。

4. 研究成果

教育学のみならず、社会学、人類学、移民研究、政治学といった隣接領域による文献調査と、日本国内の複数のブラジル人集住地域のフィールド調査の結果、在日ブラジル人青少年の進路・教育選択過程を把握するためには、(1) 彼らを定住者もしくは一時的在留民としてではなく、二つの国に足場を持ちつつ生活する人々、すなわち「トランスマイグランド」として動態的に捉えることが必要であること (2) 在日ブラジル人青少年のみならず、彼らの両親や、祖父母や祖父母の世代にまで対象を広げて調査を行う必要があること、(3) 在日ブラジル人の教育を考える上で、2008 年秋に起こったリーマンショックを契機とする世界金融危機のインパクトは、看過できないことの三点が明らかになった。

とりわけ、リーマンショックの影響で、ブラジル人たちの生活と彼らが描いていた人生設計は大きく変化した。そこで、2009 年度からは、急遽、「移動と教育戦略」というサブテーマを掲げて、上記の課題を遂行することとした。2008 年秋から 2009 年にかけて実施した在日ブラジル人家族へのインタビュー調査から、失業や収入の大幅な減少により、多くのブラジル人家族が、何らかの形で子どもの進路変更を余儀なくされている状況が明らかとなった。また、ブラジル人学校でのヒアリング調査の結果からも、退学者が続出していることが明らかとなった。公立小中学校でも、ブラジル人の転校が多いことが明らかとなった。

2010 年度と傷病、産前産後の休職により繰り越しを行った 2011 年度は、在日ブラジル人青少年の進路・教育選択のひと

つであるブラジル人学校に焦点を当てて研究を行った。群馬県大泉市・太田市、静岡県浜松市、岐阜県大垣市、滋賀県愛荘町・湖南市・米原市にあるブラジル人学校を訪問して、ブラジル人学校での参与観察と、ブラジル人学校経営者および学校長に対してヒアリング調査を行った。

調査の結果、ブラジル人学校では、リーマンショックの影響が後を引き、家庭の経済状況も学校の経営状況も困難な状況に置かれていることが明らかとなった。ブラジル人学校では、家庭の経済状況を考慮して、授業料の引き下げや日本語教育への強化等によって、退学者を減らすための措置を講じているが、生徒数の減少によって閉校する学校が後を絶たない。

また、文部科学省は、定住外国人の子どもの就学支援事業として「虹の架け橋教室事業」を実施し、ブラジル人学校を退学した子どもたちに対して日本語指導等を行っているが、同教室に通うブラジル人児童生徒の多くは、公立学校へ編入ではなく、ブラジル人学校での復学を希望していることが明らかとなった。

2011～2012 年度は、並行して、公立校を卒業後、日本の高校に進学している在学中のブラジル人生徒とその保護者に対してもインタビュー調査を行った。ブラジル人生徒の日本の高校を可能にするためには、生徒の資質や努力のみならず、中学校での進路指導や保護者の教育戦略などいくつかの条件が必要となるが、本調査では、本人ならびに保護者へのインタビューの結果、親の出身階層や学歴、家庭での経済状況よりむしろ、中学校までの友人関係や進学を希望する親の意志の方が、高校進学やそれ以降の進学を促進させることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 山ノ内裕子「逆境を生き抜く—日系ブラジル人の移動と教育戦略」、『年報 教育の境界』、第7号、2010年、15-25ページ、査読有

[学会発表] (計7件)

① 山ノ内裕子、「日系ブラジル人の移動とアイデンティティ形成—学校教育とのかかわりから—」、日本心理学会第74回大会ワークショップ、2010年9月22日、於：大阪大学

② 山ノ内裕子、「トランスミグラントとしての日系ブラジル人児童生徒」、日本比較教育学会第46回研究大会ラウンドテーブル、2010年6月27日、於：神戸大学

③ 山ノ内裕子、「移動する人生と教育—ブラジル人保護者とブラジル人学校経営者の教育戦略」、異文化間教育学会第31回研究大会、2010年6月12日、於：奈良教育大学

④ 山ノ内裕子「日系ブラジル人の移動と教育戦略」、第46回ラテンアメリカ政経学会、2009年11月28日、於：立命館大学

⑤ ハヤシザキカズヒコ、山ノ内裕子、山本晃輔、Jaqueline Kimura Nakaya「往還することと教育—日本とブラジルにおける生活史分析から—」第61回日本教育社会学会、2009年9月12日、於：早稲田大学

⑥ 山ノ内裕子「デカセギによる教育機能の変容—ブラジル日系社会と在日ブラジル人社会の調査を通して—」、日本文化人類学会

第43回研究大会、2009年5月31日、於：大阪国際交流センター

⑦ 山ノ内裕子「ブラジルの日本語教育支援に関する一考察—『外国語としての日本語教育』と『日本人性』—」、日本比較教育学会第43回大会、2007年6月30日、於：筑波大学

[図書] (計4件)

① ハヤシザキカズヒコ・山本晃輔・山ノ内裕子「トランスマイグラントとしての日系ブラジル人—ブラジルに戻った人びとの教育戦略に着目して」、志水恒吉他編著『「往還する人々」の教育戦略』、2012年8月出版予定

② 山ノ内裕子「国境を越える在日ブラジル人の教育—ブラジル人保護者とブラジル人学校経営者の「戦術」に着目して—」、森本豊富・根川幸男編著『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向かって』、2012年6月出版予定

③ 山ノ内裕子「ともに暮らせる社会—多文化共生と社会福祉」、岡田忠克編『図表で読み解く社会福祉入門』、2012、ミネルヴァ書房、179-190ページ

④ 山ノ内裕子「日系ブラジル人の移動とアイデンティティ形成—学校教育とのかかわりから」、三田千代子編『グローバル化の中で生きるとは—日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』、上智大学出版、2011年、181-193ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者 山ノ内 裕子 (YAMANOUCHI YUKO)
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：00388414